

戦争を語り継ぐ 吉永小百合さんの思い

ある投稿から、表題の吉永小百合さんの思いを知った。「戦争の体験を朗読で語り継ぐ活動を長年にわたり続けてきた、映画俳優の吉永小百合さん。終戦から 75 年の今年、新たな試みに挑んでいます。映画監督の山田洋次さんや音楽家の坂本龍一さんをはじめとするトップクリエイターたちとともに「次世代に戦争を伝える」NHK 番組の企画に携わっているのです。」(2020 年 7 月 29 日)



7 月 29 日のクローズアップ現代+「戦後 50 年 吉永小百合 戦争を語り継ぐ」では、この番組企画の舞台裏を通し、戦争体験を若い世代にどう伝えていくかを考えていきます。吉永小百合さんはインタビューで戦争を語り継ぐ活動への強い思いを話してくれました。1 時間にわたる吉永さんのお話の一部始終を掲載します。

吉永小百合さんの「戦争を語り継ぐ」思いを抜粋して紹介したい

父は戦争に行きました。病気をして、船から下ろされて帰ってきたんですね。でもその後にその船の方たちは亡くなっているから、もし父が病気にならなかつたら私は生まれなかった。それはすごく大きなことですし、その時代に誕生した自分ということ考えると、とても不思議な感じがします。

一番大変だったのは母だと思います。私が出ましたのは 1945 年の 3 月 13 日ですが、3 日前の 3 月 10 日に、深川で本当に大きな空襲があつて、もしかしたら私は防空壕の中で生まれていたらかもしれなかつたそうです。また成長するにも食べる物がなくて、母は私を背負って小田急線の沿線の農家に行つて、この子のために牛乳を売ってくださいと言つて頼んで分けてもらった。もし子どもが一緒じゃなければもらえなかつたんじゃないかと母は後に言つてましたけれども、そういう厳しい体験をして育ててくれたんですね。

幼い頃は、防空壕もまだ残つていて、そこでままごとをしたり、食べ物も全然なくて、家の近くの中学校の庭にカボチャを植えさせてもらつて、毎日カボチャを食べてた、ということも覚えています。父や母の苦勞した話を、そんなにたくさん聞いたわけじゃないけれども、今も自分の中にいっぱい抱えてるということはあるですね。女性にとって、何歳とか何年生まれつてというのはあまり言いたくないことですが、やはりその年(終戦の年)に生まれたというのは、私にとってとても大きいかもしれないですね。

私は吉永小百合さんの 3 年後、名古屋で生まれた。父が戦地から戻り、戦後の混乱のなかで、母と苦勞しながら兄と私を育てた。父はあまり語らなかつたが、「未完の自伝」に書かれていた。私は病弱な身で、よく生きながらえたと思う。ひととき母には苦勞をかけたが、こうして歳を重ねてきたので、私なりに「戦後」日本を語り継いでいきたい。

(2023 年 7 月 7 日)